

# そうせい

全国曹洞宗青年会

No. 129

2005.May

三〇周年記念事業かわら版

東日本三管区合同・東海管区大会報告

現代と宗教

駒澤大学・駒澤短期大学の試み

—駒澤大学学長・大谷哲夫先生に聞く—

# 全国曹洞宗青年会創立 30周年記念事業大会無事円成

—各管区の皆様方のご協力に、衷心より感謝申し上げます—



30周年記念事業実行委員長

阿部光裕

私たちにとって大切なのは、ひとりひとりなのです。ひとりの人を愛するためには、本当に親しい間柄にならなくてはならないのです。もし、数がそろそろまで待っていたら、数の中にひとりひとりを見失うでしょう。そして、もう二度とその人に愛と尊敬を表すことができないでしょう。私は一対一の接し方を信じます。

(『マザー・テレサ 日々のことば』)

九州管区の大会の資料作成をしていた時に出会ったこの言葉は、私の胸に突き刺さりました。私たちは、日々の接化の場で「ひとりひとり」に対してどこまで真剣に向き合っているのでしょうか。葬儀や法事といった多数の人びとを前にして、しかも、中心で上座につくことが多い私たちはどこかでこうした気持ちを見失っていないのでしょうか。

これは、九州・北海道・四国・近畿・中国・三管区（東北、関東、北信越）・東海と30周年の各大会を終えて、すべての会場で掲げたテーマに共通して言えることのような気がします。

四苦八苦のこの世界も、「仏法僧」の三宝に帰依して生きていけば渡りきることができると私たちは説きます。それはすなわち、仏がかつて行った様に人の世の苦悩をその身に背負い、修行を重ね、自らが悟りの道を得た人びとに崇敬の心を持ち、その悟りの言葉に自分の耳を傾け、同じ信じる諸人とともに手を携え生きることでありましょう。はたして、どこまで私たち自身が信仰を強くし、それらを実践しているのでしょうか。

こうした「問いかけ」をいつも自らの胸に繰り返して生きていくことを、ぜひ30周年の節目に誓い合えたらと思います。それこそが、各大会において陰に陽に力を尽くして下さった皆さまへのご恩に報いる道だと思います。

本当にお世話になりました。がんばっていただいた皆さまのお顔をひとりひとり思い出し、感謝の念を以て深く胸に刻みつけたいと思います。



全曹青第15期会長

山口英寿

全国曹洞宗青年会30周年記念事業は、「生老病死の大海を泳ぐ」～私が見つめ自らが行き自分の言葉で語る～というテーマを掲げ、全国各地7ヶ所に於いて開催させていただきました。各大会に御参加いただきました会員の皆さま、並びに講師をお勤めいただきました諸老師・諸先生方、更には会場をお貸しいただきました会場主の皆さまに、心より御礼申し上げます。

今回、全国各地での開催をお願いしたのは二つの理由がございました。一つには、会員諸師に一会場にお集りいただく事が、日程調整に対する御苦労や参加費用等の面で御負担が大きいという点。また、それに伴い御参加いただける人員にも限りがあるという事。二つには、多くの会員の皆さまがこの事業の準備に御参加いただく事によって、会員の皆さま全員が全曹青の会員である事を再確認いただける点。さらにこの事業を通じて全曹青の活動に興味を持っていただき、今後の全曹青の諸活動に御参加いただくきっかけとなればと考えての事でした。

実際に開催してみますと、それぞれの大会にはたいへん多くの御参加をいただき、全ての大会の参加者数は延べ1,000人を越えました。また、その内容に目を向けますと、企画段階から各地域の事情を考慮に入れて進めていただいた為、御参加いただいた皆さまもその内容を身近に感じながら真摯に取り組んでいただきました。いくつかの管区では、今回の大会の内容を継続事業として今後も議論を深めていただけるとのお話を伺っております。これも偏に、各管区や開催いただいた青年会の皆さまが、幾度も会議を重ね準備に奔走していただき、更に大会当日の運営にも御尽力いただいたお陰でございます。開催地をお引受けいただきました青年会の皆さまには重ねて感謝申し上げます。

今回の事業が、全曹青30周年の記念大会に留まらず、今後の各曹青会活動の活性化のお役にたちます事を祈念致しまして、御礼の御挨拶とさせていただきます。

## 04 三〇周年記念事業かわら版

— 東日本三管区合同・東海管区大会報告 —

12 全曹青情報局 — 広報委員会紹介 —

15 IT智慧ぶくろ

16 現代と宗教 — 宗教教育における現代社会へのアプローチ —

20 現代の日本における仏教環境運動(二)

22 賛助会員名簿

24 菜食健美 — 青年僧による精進料理紹介 —

25 そうせいサロン — そうせい図書館 —

26 青年会モザイク — 京都曹洞宗青年会 —



COVER DESIGN 広瀬知哲 [www.we2ya.jp](http://www.we2ya.jp)

・今回の表紙は、春の空とさわやかな風、大地に降り注ぐ太陽のめぐみを表しています。

全曹青ホームページ <http://www.sousei.gr.jp/>

©そうせい2005 本誌の写真、イラストレーションおよび記事の無断転載を禁止いたします。

## 東日本三管区合同大会

寺院の可能性を探り、私たち青年僧が社会に対して積極的に取り組んでいけることは何か

### 十二月十四日 — 一日目

昨年 の十二月十四、十五日の両日 にわたり、福島県飯坂温泉にある「パルセいざか」「ホテル聚楽」の二会場において、全曹青三〇周年記念事業・東日本三管区合同大会が、三管区（東北、関東、北信越）十六曹青会会員二二〇名を越す参加者を集めて開催された。



◀みちのく福島に東日本三管区の青年僧が集結

▼初日会場・パルセいざか



開会式 では、三〇周年記念事業実行委員会の手により、献灯・礼仏を取り入れた「祈りと誓いの式」が催された。式後の挨拶では、大会長である伊申泰純師（東北管区理事）より、『今回の各曹青会活動を紹介した「展示ブース」を通じて情報交換により「自らの言葉で語る僧侶」への第一歩としていただきたい』と、参加者に対しての言葉が述べられた。

念事業・東日本三管区合同大会が、三管区（東北、関東、北信越）十六曹青会会員二二〇名を越す参加者を集めて開催された。



挨拶を述べる伊申大会長

### 第一部

では、まず展示ブース閲覧による各曹青会活動発表がおこなわれ、参加者は他曹青会のさまざまな活動が紹介されているブースに足を運び、興味深く見入っていた。その後、全体発表会として千葉・茨城・秋田・宮城の青年会代表者による活動報告が行われた。日ごろ各曹青会によって行われている社会活動などについて、ビデオやスクリーン等を使用した懇切丁寧な説明が行われ、参加者



展示ブース閲覧



開会式・祈りと誓いの式



山口全曹青会長(中央)も各曹青会の活動に興味津津



各曹青会による全体発表会

一人一人が「僧侶としていかに社会に貢献すべきか」について考える上で非常に有意義な報告であった。

## 第二部

では、第十六代全曹青会長・吉岡棟憲老師(福島県宗務所長・円通寺住職)を壇上にお招きして、第一部で報告のあった青年会活動についての講評をいただいた。吉岡老師からは、過去に行われた青年会の活動とも照らし合わせて、時代の変遷に応じた僧侶としてのあり方や、我われ青年僧に対しての要望など忌憚ないご意見をいただいた。



各曹青会活動に対し講評を述べる、全曹青十六代会長・吉岡棟憲老師

## 初日の最後

生から「トランスパーソナルな生き方について」と題して、トランスパーソナル心理学の成り立ちから分かりやすくお話しいただき、現代社会に内在する諸問題と「個」の関係性について、非常に興味深い提言を頂戴した。(本誌六〇七頁に抄録)

二日目は、会場を「ホテル聚フォーラム」寺院の可能性と、私たちが社会に対して積極的に取り組んでいけること」が催された。当日は、各方面で教化活動をされている方がたをパ

ネラーにお招きして、活発な意見交換がなされていた。(本誌七〇八頁に抄録)

## 今大会

は三管区の合同開催という事で運営等について心配された面もあったが、関係者各位の一念な準備と迅速な対応により全体を通じて非常に円滑な運営が行われ、盛会裡に円成した。

### ◆大会を振り返って◆

東日本三管区合同大会

事務局長 岡 本 英 治

当大会では事業立ち上げ当初より、参加十六曹青がそれぞれの活動内容を『展示ブース』を設けて発表することになっていました。

それを受け事務局としては、まず①会場の設定、②展示ブース見取図の作成、③各曹青よりの発表内容の企画書を提出していただくことから始めました。必要となる展示スペースや機材の調達など、担当幹事の方がたと文書やメールのやり取りで細部の調整をしつつも、さまざまであり、また三管区という広範囲にわたるため、お互いの意思疎通を図ることの難しさも感じました。しかし、参加いただいた各曹青会諸師の懸命な取り組みにより、それぞれの特色がよく活かされた発表となりました。

合掌

### 各曹青会活動の展示ブース内容 (順不同)

#### ・神奈川第一

活動報告 — 三年の歩み —

#### ・埼玉第一

— 禅の集い・托鉢を通じて —

#### ・埼玉第二

ミャンマー難民キャンプ活動報告

#### ・茨城

交通事故殉職遭難者 慰霊行脚報告等

#### ・千葉

やすらぎダイヤル — てるてるぼうず —

#### ・青森

青森県内の檀信徒葬儀習慣の比較

#### ・岩手

近年の活動状況 布教教材の展示

#### ・秋田

『自殺』問題への取り組み

#### ・宮城

サンタピアアップ十年の歩み

#### ・山形第一

三十五年の軌跡 — 回光返照のころ —

#### ・福島

カレンダー事業 二十五年の歩み

#### ・長野第一

活動報告 禅Tシャツ販売

#### ・長野第二

三〇周年の歩み

#### ・新潟

残ロソク回収事業

#### ・新潟第四

新潟中越地震 ボランティア活動報告

# トランスパーソナルな生き方について

トランスパーソナル心理学というのは壮大なスケール、パラダイムを持っておりまして、科学的な世界と、心理学も含めて人文科学的な世界と、宗教的な世界を総合しようという企ての一つなんです。

一九六〇年代までの心理学というのは、どちらかといいますと、心を病人だ人をいかにして正常に戻すかということをやっていたんです。けれども、じゃあ正常って何だろうという問題が出てきました。普通に、人に迷惑を掛けずにちゃんと生きているという状況を、かなり大ざっぱにわれわれは正常というふうに言っています。そうやって普通に生きている人たちというのは、果たして、どれだけ正常なのだろうか。もしかしたら正常というのにも色々なレベルがあるのではないかという問題が浮上してきました。

トランスパーソナル心理学の創始者であるアブラハム・マズローという人は、病的に生きている人、心の病を抱えている人ではなくて、バイタリティーがあって、生き生きと生きている、創造的で生産的な活動をしている人たちに注目したんです。いろんなアンケート調査をしたりしまして、そういった人たちに次から次と会って、どういう人生を歩んできたのか、どういう体験をしてきたのか、ということを書いてきました。

それで明らかになってきたことの一つには、その中で、ある種の特異な体験をしたという人たちが多かったという点です。彼はそれを「至高体験(ピーク・イクスパーリアンス)」と名付け

ました。これは、特別なことをしたからという訳ではなく、普通の家庭の主婦が、暖かい縁側で夫の洗濯物を畳んでいるうちに、何かすごい幸福感が訪れてきたとか、音楽を聴いていた時とか、何かちよっとしたきつかけを通して、自分が自分の範囲を越えて広がっていくような体験、簡単にいうと、宇宙的な気持ちになったり、宇宙に自分が広がっていったら、宇宙と一体化するような、そういうことを体験する方を指しているんです。そういう体験をした方というのは、何かこう、どこかでそういう違う人生を歩み始めるということがあるのではないのでしょうか。

彼は、「自然発生的にそういうふうな体験をするということじゃなくて、もう少し体系的に、そういう体験を、ある意味では人為的に生み出せないものだろうか。そういうふうな人間の心とか、成長というものがあつて得るとすれば、方法論みたいなものはないだろうか」というふうに着目し始めたんです。

トランスパーソナル心理学では、現代のさまざまな問題、環境問題から教育の問題、死の問題、老人問題、こういったものの根底にあるのは、あまりにも行き過ぎた個人主義であるというふうにとらえております。もちろん、個人として近代的な自我を持つということは重要でしたし、今の時代でも決して蔑ろにされるべきものではないと思いますけれど、ただ、それが成長の頂点というふうな考えとしたら、人間はどこでどういうふうにつながつていけばいいのか、という問題がどうし



てもおろそかになってしまします。個人というものをしっかり持ちながら、なおかつ、より共同体的な意識とか、グローバルな意識とか、そういうものを同時に持てるような人間性が、現代、必要になってきている様な気がいたします。

「前個」から「個」、「超個」というような人間の成長の在り方、これは一人一人の人間の中で行われるプロセスですけれども、大きく歴史を振り返ってみると、古代の社会、自然に埋没していた原始的な暮らしをしていた民族から、徐々に近代社会が出てきて、今はその近代社会の矛盾にわれわれは直面しております。その近代社会を超えるために「超個」というものをベースにした社会を作らなければならぬ、というふうな方向性を打ち出しているわけです。

健全な心の在り方を持つている人たちの生き方の先には、キリストや仏陀というふうな存在がある。そういう人たちが自体が、そういうふうな人間が成長できる可能性を持っているという実証です。

そういう新しい成長モデルを、じゃあ、どういうふうにして実現していくのか。

そのときにマズローなどが注目したのは、東洋的な行の世界なんです。皆さんのやっておられる坐禅も含めて、東洋的な行の世界というのが、偶然ではなくて、自分でそういう至高体験を引き寄せるための方法論として使えるのではないかと、いう事なのです。そしてダンスや詠唱も含めて、昔からあったものに注目し始めたんです。そういったものは宗教団体のための特殊な方法論ではなくて、より開かれた形にすれば、人間により高い成長を促すための方法論になり得るのではないかと、いうふうな考えられる様になってきたのです。

十四歳とか、ある一定の年齢になったら、死と再生の体験みたいなものを、どこかの山に連れて行って一晩中瞑想をさせたり、過去の記憶を思い起こさせたり、いろんな形でやらされていたわけです。現代社会において若者たちをどういうふうにして成長させるかということが大きな問題になっていると思うのですが、そういう意味での通過儀礼というものを失ったがゆえに、どこで人間が大人になるのかというところが全然分らないというふうな状況が出てきているのではないのでしょうか。

今は社会全体でそういう通過儀礼を行うということはなくなりました。逆に、個人が個人の成長を任されているという時代です。だけれども、どういうふうなすれば成長のステップを踏めるのか、ということをお学校では教えて

くれません。だから、年は取ってもなかなか大人になりきれないという事態が発生しているのだと思います。

昔みたいに社会一律的に通過儀礼をやれとかということになりますと、また大きな問題が出てくるかもしれません。徴兵制をやれとか言う人も出てくるかもしれません、そういう強引なやり方ではなくて、体験学習みたいなものを普及させていく必要があるのではないのでしょうか。

もちろん、それにも問題がないわけではありません。体験学習とか、そういった集団になると、あまりにも密になり過ぎて、排他的な集団になったり、その集団の中では仲が良いが他の集団とは対立するみたいな、そういう傾向も出てきます。某カルト教団みたいになつていくというような危険性もはらんでいます。そういう意味での二面性を持っていることを認識してやらないと、大変なことになるのでないかと、一方では思うのです。



# 十二月十五日 二日目

## オープン・フォーラム

東日本三管区合同大会・二日目(十二月十五日)にはオープン・フォーラムが、『ホテル聚楽』に会場を移して行われた。本フォーラムの主題は、「寺院の可能性と、私たちが社会に対して積極的に取り組んでいけること」と題して、パネラーを四名お招きし、コーディネーターを三〇周年事業実行委員長のア部光裕師がつとめ、討論形式で進められた。

### ◆ハワイの寺院は

#### 日本仏教のアンテナショップ

【飯島】 ハワイ、アメリカという社会は、キリスト教がベースで他の宗教もたくさんございます。曹洞宗とか禅というのはグループとしては小さいわけ、社会にいろいろ貢献しないと、「その宗教はその社会にとって必要ない」ということで、どんどんと見捨てられていってしまうという状況がございます。そんな中で、ハワイの場合ですと約百年、曹洞宗が持っていたわけです。これから百年持つかどうかというのは、これからの貢献度に掛かってくるという厳しい環境がございます。

日本ですと檀家さんという、若干甘えられる部分があると思いますけれども、ハワイのお寺、サンフランシスコ、ロサンゼルスも、メンバー制でございまして流動的なんです。いろいろな活動を積極的にしなきゃならない。

青少年の育成、病院、ケアセンターに足を運ぶ。日本の文化を伝える。そ



飯島尚之師

れと、宗派を越えて仏教徒の裾野を広げていく。お寺に集まってくるのは毎週日曜日。日本ですと法事が多いんです。

それぞれ興味、年齢に合わせて参加できるようなプログラムが構成されているのが特色です。

ハワイを、私は、日本仏教界のアンテナショップだと思っている。「海外から移民をどうこうする」という話も出てきています。そうすると、いろんな文化の人たちが日本の中に生活する形になります。海外のお寺はそんな中で百年サバイバルしている。そういったインフォメーションを考えていく必要性はあるんじゃないかというふうに思っています。

### ◆医療者、教師、僧侶への

#### カウンセリングが必要

【三つ橋】 私は、普段の生活はカウンセラーとして生計を立てています。自宅で電話相談、面接相談。あとは月に二



三つ橋尚伸師

回、病院にカウンセリングに行っております。病人の方にもしておりますし、医療スタッフへも、実はしているんです。特にホスピスとか緩和ケア病棟ですと、日々、死と向かい合わせで、ケアする側が先に燃え尽きてしまうんです。現場では、それまでの家族関係でだいぶ変わってきます。家族関係が良かったケースは、たとえ体力がなく気力がなくなっても、それほど介入しなくてもうまくケアができるんです。健康の喪失であるとか、死が近いとか、大きな事柄があったときに、それまでの関係性が表面にぼーんと出てくるわけです。そのときにそれまでの関係性が悪かった場合はとても大変で、家族療法になります。

悩んでいる方、相談者が主人公であるということ、そこを絶対に外してはいけない。人の話を、自分の枠組みとか自分の価値観、自分の考えを通して聞くことしかできないんです。聞けていない自分とか、相手の悩みに沿えない自分にどんどん気づいていきます。

上からお説教をしたり、ものを指導したり、提案するのは傾聴法ではないんです。同じ高さで相手と同じ気持ちになる、そこが基本になります。

【阿部】 今、先生のカウンセリングが異常に多いという。

【三つ橋】 多いのが僧侶と教師ですね。内緒にしているだけです。精神病になられる方もいっぱいいらっしゃいます。入院したり、ふらっとどこかへ行ってしまった場合には、お山に修行に行つたというふうに言っていらいっしやいます。

◆梅花と吹奏楽の融合から新しい波を

【佐藤】 梅花をもっと地域の方がたに宣伝してみようと、虚空蔵様のお祭りに吹奏楽団をお呼びしコンサート



佐藤正明師

を開きました。梅花をマーチ風にアレンジして駒澤大学の吹奏楽部の方がたがやった譜面を取り寄せまして、歌えるようにちよっと手直しをいたしました。地元吹奏楽団に演奏してもらいました。

梅花講員の方がたは、とびきりの真っ白いブラウスに黒のロングスカートの。あの輪袈裟の鮮やかな青い色がとても映えるんです。真っ赤な台紙に譜面を載せまして、一時間の演奏の十分ほどでしょうか、奉賛マーチを演奏しました。私たちだけではなくて、特に吹奏楽をやっている子どもさんたちに大きな刺激になりました。

まず、現在活動なさっている梅花講員の方がたに、「梅花つて素晴らしいんだ」という気持ち、感動を与えて、そこから新しい波が出来てくればいいんじゃないかと思えます。

全国の方から、懇親の場で生の声が聞かれることは確かなんです。「いっそ梅花服をやめて、それこそブラウスとか、合唱スタイルにすれば、もしかして若い方がたが入ってくるのではないのか」「鈴と鐘をなくして、合唱のようにやったらどうでしょうか」というふうなご意見も伺いました。ところが、年配の方がたに聞いてみますと、「詠歌はお寺に来て正座だよね」「鐘を鳴らし、鈴を鳴らす、あの響きがいんだよね」ということで、世代間のギャップはあるわけです。

◆事故現場での供養を通して  
【阿部】 米澤さん、これは茨城青年会

一丸となってやってきたわけでしょう。現場では、置かれている供物にも、やるせない、残された人の思いが見て取れます。朝まで元氣だった人が無言の帰宅をするのが交通事故の怖さであって、本当に世の無常を感じる亡くなり方ではないかと思えます。

遺族の方がたのお話で、「突然逝ってしまったのだから、いつか戻ってくるんじゃないか」と、どこかに期待を掛けたりしながら、亡くなった、特にお子さんの部屋を片付けられないといううことは聞きます。「わが家の家族の時間はもう止まったままだ」という言葉も聞いたことがあります。



米澤智秀師

たとえ回忌法要を勤めたとしても癒やされない悲しみ、むなしさ。生きる力を失っているような状況の方がたと一緒に歩くということ、われわれも、死の現場、あるいは葬儀の現場に立ち会って来ていたわけなんですけど、「お檀家さん一人一人の死や悲しみに本当に向き合っていたのかどうか」というのを、切実に感じるようになりました。

◆セルフカウンセリングを促す

大切な儀式を

【三ツ橋】 私は、読経とか儀式に、ものすごく力があるというふうな感じにしています。意味も分からず聞いていたとしても、その間にはセルフカウンセリングが行われているわけです。本当の自分の問題に否が応でも向き合わざるを得なくなる。だからとても大事な儀式だと思っんです。

例えば、七日ごとの中陰の法要があ

ります。カウンセリングも、原則的には一週間に一回とか十日に一回ぐらいを、七回から十回やって、ワンクルールを終了と考えているんです。まさに仏教の儀式がカウンセリング通りになっているので、今、ほとんど省略されてしまっているけれども、そこで自分と向き合ういいチャンスを利用してしまっているんです。

電話一本、七日ごとに掛けてあげるとか、相手に経済的な負担を掛けずに僧侶ができることっていっぱいあると思います。

◆宗教者にしかできないこと

【三ツ橋】 カウンセラーでなく、宗教者でしか行えないことが一つあります。人は、死を感じたときに、懺悔が始まることごとく多々あります。例えば、赤ちゃんを墮ろしてしまったりとか、人を傷付けたとか、さまざま懺悔が始まります。人は重荷をしょったまま死んでいけないんです。一つでも荷物を下ろして死にたい。

そこで、宗教者にしかできないことは、仏様からの赦しを伝える役目です。まさにキリスト教の神父さんの役目です。懺悔した時点で「あなたは既に赦されている」と、重荷を一つでも軽くして、亡くなっていただく。ぜひ、そういう現場で力を発揮していただきたいと思っんです。

【飯島】 仏教自体は究極的な情報産業だと言えらると思う。約二千五百年間の情報が脈々とあり、また、道元禅師様から七百五十年以上の情報がある、この膨大な情報を檀信徒の方がたに伝えなくてはならないのが、仕事であり、使命であると思う。さらには、その場を作る必要不可欠であり、その中から問題解決の糸口を探していくというのが、我々若い僧侶の課題ではな

かろうか。

【阿部】 仏教で一番大切なことは、『人の気持ちに分かる』ということでしょう。その気持ちが分かるから出来る行動。そこに辿り着くのだらうと思っんです。是非、何か新しいことや、今までのことを継続するにも、何か試みを行っていただきたいと思っんです。自分の独自のものを行う、これをお互いに誓え合えたら素晴らしいことだと思っんです。



討論開始に意気込むパネラーの面々

三ツ橋尚伸

一九四九年東京都生まれ。三十九歳で浄土真宗大谷派にて得度、僧侶となる。心理カウンセラー、日本カウンセリング学会会員。専門は傾聴法と交流分析。仏教とカウンセリングの融合を通して、本来宗教が持っていた癒しの力の回復を目指し、日々活動している。

佐藤 正明

宮城県柴田町 恵林寺住職 曹洞宗梅花流特派師範

飯島 尚之

東京都中野区 宗清寺副住職。S Z I (S o t o) 禅 インターナショナル 事務局長

米澤 智秀

三〇周年記念事業実行委員

# 東海管区大会

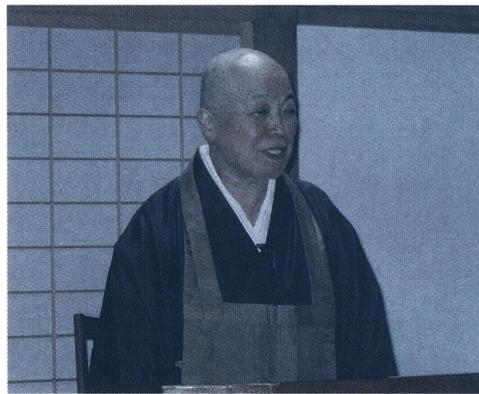
## 「初心」～今の自分に喝ノッ

去る平成十七年一月二十五日、二十六日、好日の下愛知県名古屋市の愛知専門尼僧堂・正法寺（堂長・青山俊董老師）で、東海曹洞宗青年会（会長・志比道栄師）・全曹青主催、曹洞宗宗務庁協力による三〇周年記念事業東海管区大会が行われ、全国七箇所を巡って行われてきた周年事業の掉尾を飾りました。

なお、東海地方各地から百四十人の参加者が集まり、今大会のテーマである「初心」に戻り、久しぶりの僧堂生活を楽しんでいる様子でした。

### 基調講演

開講諷経後の午後二時から、東海管区がテーマとして掲げている『「初心」～今の自分に喝ノッ』を演題として、愛知専門尼僧堂長の青山俊董老師による基調講演が行なわれました。冒頭に老師は、以前タクシーに乗車した際に運転手から「坊主をやっているのですか」と聞かれたことに対し「坊主は職業ではない。また生きていく為の手立てではない。誰しもがたった一度の命を最高に生きたいのであり、求めて行き着いたのがこの姿になったのだ」と答えたエピソードを紹介し、自身の僧侶観について語りました。老師



熱く語られる青山俊董老師

が大学で学んでいた二十代の頃の話として、身内を亡くされたある信者さんからの「息子はどこへ行っただんでしょ」との問いに、答えられなかったことを語り、僧侶とは何かを考えるきっかけとなった経験を披露しました。そして「たった一度の命を、悔いのなく本気で生きるように引き導くのが引導であり、死んでから引導を渡すのは本当でない」と葬式、法事のほかに、生身の人間を相手にしたお寺の活かし方について考えるよう参加者に問いかけました。

会場からの「檀務に追われ、家族を持つ我々は、理想と現実の狭間で揺れ

動いています。どう納得すればよいのでしょうか」という質問に対し、具体的なアドバイスとして「生きた人を本気で救済することが大切です。過去帳よりも現在帳を作ることをお奨めします。そして、檀家一軒一軒どういう問題を抱えているか。それぐらい全部把握するという誓願をもっていた方がいいですね」と、宗教者の心構えを説かれました。「檀務は大事にして下さい。それは生きた者として、生きた法を伝える場としてのです。法事を仏法の語らいの場にするのです」とも付け加えられました。さらに「お葬式が悪いんじゃない。ただ職業としてしない。お葬式を生きた教化の場にする。生きた死を見つめる場にする。死を見つめることによって、生を問う場にする。そのように導く。そう思います。一番大事などころを扱わせてもらうんですからね。ありがたいと思って、大事にしていくことが大切です」と話しました。

最後に参加者へ「自分が仏法に惚れ込んで、僧侶として、仏道を生きたことの喜びの中に生きていけば、そんな素晴らしいものならば、私も行こうじゃないかとまわりがついてきます。そういう姿が大切ですよ」とエールを送りました。そして今回の演題にもある「今の自分に喝」を意識されてか、若い僧侶には「少なくとも僧侶の財産は仏法です」と話し「生きた仏法をどう相続するか。それを知っていれば、必ずその相続者はできるわけです。寺の伽藍ばかりあっても、仏法が不毛

### 一日目 夜

基調講演後は、全員で記念撮影となりました。記念撮影が終わりますと、寺内に残った参加者は、引き続き薬石となりました。薬石のメニューは飯に粕汁、そしておでんと香菜等でした。この時期はまだ朝晩が冷えますので、身体が温まる非常にありがたいメニューで、尼僧堂の皆さまのお心遣いを感じました。



尼僧堂の方がたの心づかいが感じられる

その後はビデオ鑑賞となりました。ビデオは、『決断の一滴』と題されたNHKのプロジェクtoxからです。日本初の骨髄バンクが東海地方で成立したことの因縁もあって、今回の上映となったようです。元白血病患者であった大谷貴子さんと、森島泰雄医師が、白血病患者の命を一人でも多く救おうと行われた、これまでの地道な活動を取材した内容となっております。

午後八時からは正法寺の僧堂をお借りして夜坐となりました。八時十五分止静でしたが、ここまでの疲れもあって、足の痛みをこらえつつ随喜した参加者も多かったのではないでしょう。法堂での就寝は九時三〇分過ぎには消灯となり、明朝五時起床に備えて大半の参加者は直ちに眠りに落ちたようです。

## 二日目 朝

午前五時近くになると、配役に当たった方が起き出しました。五時には振鈴が法堂に鳴り響き、昨日早めに休んだ参加者諸師は時間通りに起床することとなります。そして、洗面を済ませると、ただちに僧堂に入り、五時十五分から暁天坐禅を行いました。前日の夜坐の疲れも何のその、気合いの入った坐禅が行われておりました。

六時過ぎからは、朝課を行いました。導師は、三〇周年記念事業実行委員会の渡辺宗徳師が勤めました。朝課が終わると、直ちに小食飯台でした。参加者は、懐かしい玄米粥をいただきながら、心のこもった料理を堪能していきま

した。再進をした方も多かったようです。小食が終わると、宿泊した参加者は、それぞれ法堂・僧堂・外に別れて作業を行いました。

## 討論会

二日目は「寺院に対する施主の本音」と題し討論会が行われました。初日に引き続き、パネラーとして青山老師に登壇していただいたほか、東海管区会長、全曹青会長、記念事業委員長が参加しました。また、互助会と葬儀会社の担当者、葬儀などでの問題に対処しているNPOの代表者も参加して、寺院と施主の間で起こった実際のトラブル等を紹介してもらいました。

第一部は、寺院と施主との間に、どのような考え方の違いがあり、結果的に施主側の不満に結びついてしまうの



互助会、葬儀会社、NPOの代表者

か、検証し討論しました。東海管区の事務局は、このすれ違いを「寸劇」という形で再現しました。その内容ですが、お布施の額面についてや、葬儀後話をする機会もなくすぐに帰るお坊さんの姿など、参加者にとっては耳の痛い話を取り上げられました。パネラーの諸師からは、お寺と施主とのコミュニケーションが不足しており、お互いの信頼関係の構築が必要であることや、寺院の経済事情をオープンにし、寺院護持の理解を得るなどの声が聞かれました。青山老師は、喪主の悲しみに寄り添い、その痛みをどう受け止めるか、僧侶が本気で取り組んでほしいとエールを送りました。

第二部は、実際にあった相談事例を紹介しながら進行了しました。菩提寺で葬儀をしなかった例、お墓を追い出されてしまった例、葬儀者紹介のお寺さんに葬儀をしてもらったが、戒名をもらえず、俗名で行われたなど、深刻な相談例が挙げられました。NPO代



東海管区大会事務局員による寸劇

## 最後に

表者は、相談者の特徴として「お寺と主従関係のようなイメージをもつ方が多く、納得できない部分を抱えていることが、後日不満として噴出してくる」と諸問題を分析、コミュニケーションの必要性を訴えました。パネラーからは「待ちの姿勢ではなく、お寺も積極的な情報発信や、進んで信頼関係の構築に努めるべき」との意見が出されました。

最後に青山老師から参加者へ、「どんな場面でもそこに誓願がなければならぬ。生きた人間に本気でぶつかってほしい」との激励をいただきました。二日間連続のハードな大会でしたが、参加者は、初心に戻り、僧侶である自分を確認できた良い機会となったようです。



左から、阿部30周年記念事業実行委員長・青山老師・山口全曹青会長

## 各地方大会を振り返る

### ◆九州大会

熊本・大慈禅寺の庫院に、汗を流す第十三期事務局長の磯田浩隆師の姿があった。運ばれてきたのは、手作りの親子丼。こういう集まりの時には仕出し屋の弁当が多い昨今、それは、経費削減でもあろうが、温かい気持ち伝わってきた嬉しくなった。

真つ向から人々の生死を見つめ苦悩に寄り添おうと臨済宗仏通寺派管長の立場を捨て僧医の道を志した对本宗訓老師の言葉はどこを切つても真実の姿を呈して胸に響いてきた。布教師養成所講師・増田老師、佐賀県内でホスピス活動に心血を注がれておられる平川老師には自らの生き方で宗侶のあるべき姿を示していただいた。

### ◆北海道大会

旭川・大休寺の千体観音尊前にて、意識した「八大人覚」を誦し祈りと誓いの式を勤めさせていただいた。くしくも講師・松村俊昭老師のご講演の中でも「八大人覚」が説かれ、仏教者としての原点に回帰していくことの大切さを改めて認識することとなった。分科会では、具体的に私たちが直面している問題について青年会員が個々の言葉で語り合った。

講演会などの講師選択に悩む青年会があれば、ぜひ広い人脈を持つ松村老

師に相談されることを薦めたい。そう、池田さんありがとう。

### ◆四国大会

大型の台風が接近する中、四国曹青二〇周年記念大会ということで本大会の参加者で会場は賑わった。いつお会いしても板橋禅師の飄々としたお姿と、時折見せる鋭く力ある眼光は印象に残る。

参加された寺族の皆さまに討論会についての感想を聞いてみたい気がする。私たちの布教はまず寺族に対して行うべきだと言った人がいる。論じられるので私たちの日常底も問われるからだそう。

数の上では、他管区より圧倒的に少ないのだけれど、四国は熱くてパワーがあることを改めて感じた。

### ◆近畿大会

東大寺教学執事の狭川さんの動きの軽やかさには驚いた。しかも心が広くて優しさに満ちている。「慈愛々あな」の優しさにつまれて」というテーマそのものの人だった。

蓮華台から拝する毘盧舎那仏はまさに沈黙の仏、しかしながら四方八方にその仏光を発していた。

岩崎順子氏の講演をまたどこかで聞いてみたい。悩み苦しみながらもきつ

と歳を重ねていく度に彼女の言葉はその威力を増していくに違いない。ほんとに素敵な人だった。

### ◆中国大会

何をしても裏で支える実質的な立て役者はいるものだが、事務局長末益師の人柄と気配りの美しさには頭が下がった。それを養老先生も見抜いていた。それに、多々良学園を支える人たちが素敵だ。きつとあの高校からはいい人材が巣立っていくに違いない。

養老先生の頭には、「バカの壁」はほとんど存在していない。真実をどんどん見抜いていく。だから、人は養老先生に興味を示す。本来は禅僧たる私たちがそうでなくてはいけないのだが、そうでもないから坊さん同士が争いをしたりする。

解りやすい葬儀を目指して先生や青松寺・喜美候部老師にはお隠れいただいた訳だが、これからも自分の言葉で仏教を説き示す努力を続けていきたいものだ。そして、最終的にお経一本で生きていける僧侶になればと思う。

三管区（東北、関東、北信越）と東海については今号で特集されるので省きました。各大会を語るにはあまりにもスペースが足りなく、このような形になってしまつてスイマセン。いづれにしても、どの大会にも感動があったことを最後にご報告いたします。

（全曹青三〇周年記念事業  
実行委員長 阿部 光裕 記）

寺院用仏具・仏壇・製造販売  
曹洞宗梅花流法具販売指定店



ほう 光

本店・工場 〒940-0825 新潟県長岡市高畑町617番地  
新潟店 〒950-0941 新潟市女池2丁目2-11  
川越店 〒350-0036 川越市小仙波2丁目20-1  
高崎営業所 〒370-0046 群馬県高崎市江木町1179-2  
長野営業所 〒380-0911 長野市稲葉1980-1

☎(0258)33-5644  
☎(025)280-1550  
☎(049)227-7666  
☎(027)324-3721  
☎(026)222-3811

http://www.hoko-butugu.com/

# 全曹青情報局

## 委員会紹介

### 広報委員会

思い起こせば二年前、第十五期広報委員会として初めて手掛けた『そうせい』一・二二号において、私は委員長として次の様な所見を述べさせていただきました。

『そうせい』は全曹青と現代社会とを繋ぐ媒介役でしかありません。我々の理念と志をメッセージとして、広く宗門内外に発信できればと考えております。そのお膳立てを我々がさせて頂ければと思います。

その思いは現在でも変わりはなく、またこれまでの二年間もその思いに支えられながら『そうせい』編集に務めてまいりました。

広報誌『そうせい』（広報委員会担当）、公式ホームページ「般若」（IT委員会担当）に代表される、全曹青の広報媒体の作成を手掛ける委員会においては、その活動は組織の「脇役」であって「主役」ではないものと感じています。

なぜなら、広報媒体とは組織の見解をメッセージとして外部に発信する情

報ツールでしかなく、そのツール自体が「主役」の様に機能しているは、組織の脆弱さを外部に露呈しているに過ぎないと考えるからです。

全曹青の場合、「主役」はあくまでもその組織を構成する各委員会の活動自体でなければならないでしょう。

その様な立場から、我々は広報媒体（広報誌）としての役割と責務を果たすべく、この二年間各委員会の活動報告と出向委員紹介に紙幅を割いてまいりました（全曹青情報局 など）。

また、各曹青の事業内容を紹介させていただくことにより、全国の会員諸兄に有益な事業情報の提供を心掛けてまいりました（「そうせいインフォメーション」、「青年会モザイク」など）。

さらに宗門で掲げる「人権・平和・環境」のスローガンに倣うべく、「ディスカバーヒューマンライツ」（人権）、「イラク戦争に関する特集記事」（平和）、「現代の日本における仏教環境運動」（環境）といった企画記事を、前期（第十四期）から引き続き継続・立案してまいりました。

もちろん、昨年度連載をしてきた「三〇周年記念事業かわら版」も、広報誌としての負託に応えるための記事枠でござります。

それらの企画記事を通して、全曹青としての理念と志を広く宗門内外に発信をし、あくまでも「脇役」としてお膳立てをさせていただいたつもりです。

そこで第十五期最後の編集となる今号では、私ども広報委員会の活動報告をもつて総括とさせて頂いていただければと思います。

## 『そうせい』編集における二年間の軌跡

既述もした様に、広報委員会は全曹青広報誌である『そうせい』の編集・発行を主な事業内容としております。

『そうせい』の内容に関しては、今まで諸先輩方が築かれてきた路線を基本的に踏襲しつつ、主に宗門関連記事と時事問題記事に焦点を当て、時宜に応じた企画記事を推し進めてまいりました。

特に時事問題記事に関しては、現代社会に内在する諸問題を、青年僧並びに現代青年の視点から深く掘り下げ、広く社会に対してメッセージを発信する事に重きを置いてきたつもりです。

その編集姿勢が、我々青年宗侶が社会に対してどの様な参画意識を持っているかを知ってもらう術になり得ると考えたからです。

『そうせい』では、購読者が宗門関係者と一般読者へと大別される故、その両者のニーズにバランス良く応えつつ、そのメッセージの根幹に流れる精神は「仏教」に通じるという主張を明確にし、創意工夫を繰り返して



執行部・理事会終了後には『そうせい』編集会議

ながら編集作業に努めてまいりました。

また、他の委員会と比べて突出した予算をお預かりする広報委員会においては、その予算の殆どが『そうせい』の印刷・発送に伴うハード面の予算に費やされます。

それらハード面の予算は、現在の紙面規模や発行部数を維持する限り、削る事ができない必要経費でございます。

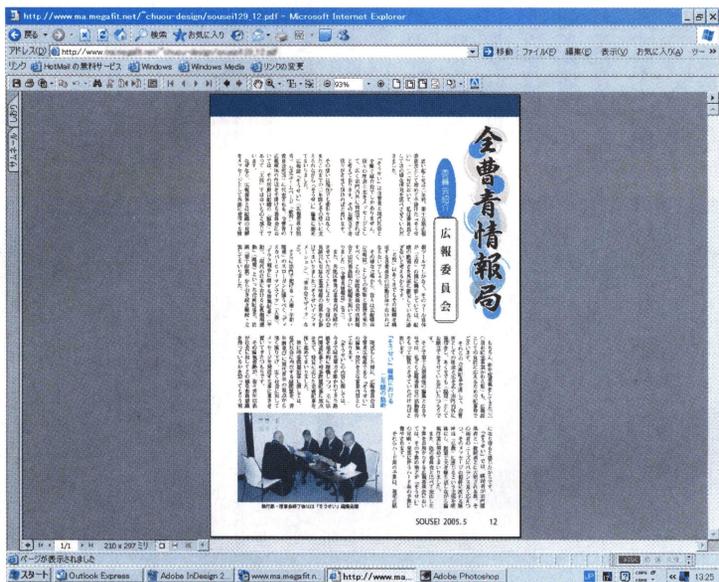
第十五期では発足当初、委員全員が『そうせい』の編集経験がなかった故、そのハード面の対極にあるソフト面の予算、つまり紙面の充

実を図るための取材企画費に限りがある事が一番辛い現実でございます。

よって、委員長として初めに手掛けた仕事は、限られた予算内でどれだけ紙面の質向上が図れるかというソフト面の予算に関する創意工夫でありました。

具体的には、編集会議開催に伴う会議費(各委員の交通費など)の削減であり、第十五期広報委員会においては次の様な施策をもって経費削減に努めてまいりました。

①インターネットを媒



PDFファイルによるインターネット上でのゲラ情報の共有化

介した編集会議制の導入(チャット編集会議の開催や広報専用メンバーリストによる意見交換など)

②各記事企画書、割付表、編集行程表などの回覧による役割分担の徹底化

③印刷業者と連携したPDFファイルによるインターネット上でのゲラ情報の共有化(写真参照)

これらの施策により生じた余剰分の予算を、可能な限り紙面充実のためのソフト面の予算に運用してまいりました。

また、広報誌としての機能を高める

①メーリングリストを活用した委員会校正、並びに執行部・理事校正制度の導入

②宗務庁教化部企画研修課(全曹青の所管部署)との共同作業による最終校了制度の導入

などを試験的に実施してまいりました。

これらの施策により、関係者各位の生の声を紙面に反映させる事が可能となり、広報誌を編集する際の機能的な作業システムを確立いたしました。

これらの試みは、今後の委員会活動のみならず、各曹青の諸活動においても還元し得る内容だと思っておりますので、紙面をもってご報告させていただきます。ばと思えます。

## 「種蒔き」から「開花」の時期へ

既述もした様に、委員全員が編集のイロハも分からず、それこそ試行錯誤を繰り返しながら無我夢中で突っ走ってきた二年間でございます。

慣れない編集作業に戸惑いと焦りを覚え、時には会員諸兄より叱咤激励をいただきながら、関係者各位のご支援ご協力を得て今日まで務めてこれた様な気がいたします。

委員長就任当初、困難を極める編集作業に何とか打開策を見出そうと、薫るも掴む気持ちで過去の『そうせい』バックナンバーに編集のヒントを求めた時でした。

何気なく手に取った『そうせい』九九号において、私はある記事と出会い目

修復工事から新築工事まであらゆる対震(=対地震)工事に最新技術<sup>※</sup>で対応しております。日本古来の伝統の技を伝承する、魚津の設計と施工。

※大本山總持寺香積台耐震改修工事で採用させて頂きました。

神社・仏閣専門建築

株式会社 魚津社寺工務店

〒454-0004 名古屋市中川区西日置二丁目12番20号  
TEL(052)331-3080・0854 FAX(052)332-3540

から鱗が落ちる思いがいたしました。

それは、時の広報委員長・東井明師が寄せた当時の広報委員会の活動報告記事でした。

そこには、東井師が檀信徒の方がたと『そうせい』発送作業を行っていた風景や、第三種郵便認可取得に向けての微に入り細に入りの経過報告が寄せられており、その弛まない師の努力に私は只々頭が下がる思いがいたしました。

その記事を目にした時、『そうせい』編集長としての重責と、今まで諸先輩方が築かれてきた歴史の重みを肌で感じ、自分の代でその伝統を貶めてはいけなさと、自覚を新たにいたしました。

現在、『そうせい』編集に携わる広報委員会においては、そういった諸先輩方の努力や、賛助会員の方がたの物心両面にわたる支援によって支えられております。

時代の変遷に伴い、紙面デザインやレイアウト、記事の内容編成は変われども、その底流にある精神は不変でなければならぬと強く感じました。

ぜひ読者の皆さま方も、現在の『そうせい』を通じて、全曹青の歴史や伝統、また今後に向けての理念と志を汲み取っていただければ幸いに存じます。今後とも変わらぬご指導ご鞭撻のほどを宜しくお願い申し上げます。

その様な諸先輩方の種時き作業があり、多少なりとも我々第十五期が枝葉を伸ばし、今後の編集を託す第十六期において満開の花を咲かせていただければと祈念いたします。

最後に、今まで宗門内外から『そうせい』編集に関する貴重なご意見ご教導を賜りました事、紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

また、私事で大変恐縮ですが、兼職の身でありながら広報委員長就任に際しご高配を賜りました曹洞宗総合研究センター関係者各位、また二年間の編集活動を支え続けてくれた本庁教化部企画研修課並びに全曹青執行部・理事各位、その他お世話になった全ての方がたに対して重ねて厚く御礼申し上げます。

(広報委員長 秋 央文)

## 各委員コメント



委員長  
秋 央文  
(福島県 曹洞宗青年会)

「担がれる御輿は重過ぎることなく、しかし決して軽過ぎることなく、人の上に立つ事の意味を学べた様な気がいたします。」



副委員長  
久間 泰弘  
(福島県 曹洞宗青年会)

「二年間という決して短くない、しかし、あつという間だったこの期間、さまざまな方とご縁を頂戴いたしました。ありがとうございます。」



副委員長  
菅原 研洲  
(宮城県 曹洞宗青年会)

「たいへん勉強になった二年間で、ありがとうございました。合掌。」



河村 康仁  
(北海道第一 宗務所青年会)

「多くの青年会活動や諸先輩方のご指導ご助言を通して、自身の指針に生かすことが出来、たいへん勉強になりました。」



安彦 智峰  
(北海道第二 宗務所青年会)

「法縁に恵まれ、自身の浅学をあらためて思い知りました。これを糧として精進してまいります。」



武田 光誠  
(埼玉県第一 宗務所青年会)

「二年間の全曹青の活動を通じていただいた多くの方がたとの仏縁に深く感謝いたします。」



広瀬 知哲  
(委託編集委員 石川県)

「諸先輩方のご指導に感謝し、今後精進して行きたいと思っております。」



藤木 総宣  
(委託編集委員 福井県)

「今後も世の中にある苦について、何が原因か見つめていきたい。まずは“知る”ということが大切だと考えています。」

谷口法衣仏具店ならではの……  
技の粹  
御法衣、御坐敷、  
御仏具、経典、記念品



株式会社 谷口法衣佛具店  
〒100-0001 東京都千代田区高江津船場町東入ル  
電話 075(35)9741(代)  
梅花講部指定販売店

大本山永平寺御用  
大本山総持寺御用



落雁諸江屋  
全茨市増泉三丁目六の三五  
TEL 0292-21-1154 四六六六  
FAX 0292-21-1157 一八四九

# IT 智慧ぶくろ

読みやすい新聞をつくらせてみよう

近隣の方から「便利だからという  
ことでパソコンを導入はしたけれど使  
い方が…」という声を今でも耳にしま  
す。せっかく買った物を無駄にしない  
ようにと苦労して文字を入力できるよ  
うになっても、ソフトの使い方が分か  
らずパソコンに近づく機会が減ってい  
る人もいらっしゃるのではないでしょ  
うか。

そこで「そうせい新聞(仮題)」の  
作成を通し、役に立つ基本的な機能を  
いくつか紹介したいと思います。いく  
つかの機能を覚えるだけでパソコンの  
用途は無限に広がっていきます。寺報  
や新聞・広告・お知らせなどなど。

さて、一般には多くのソフトが出  
回っていますが、ここではウィンドウ  
ズのワープロソフト「Word(ワード)」  
を例に説明をしていきます。他のワー

プロソフトをお使いの場合も、そのよ  
うな機能が有るということが分かって  
いるだけで利用の幅が広がるものです  
し、似たような機能がありますのでご  
一読下さい。

さて最初に設定されている状態で  
新聞を作成すると図1のようになりま  
す。A4サイズの用紙縦向きに、フォ  
ント(文字)が横書きの文章が出来上  
がります。これでもフォントのサイズ  
や空白の行をいれるだけで読みやす  
くなります。

しかし、一工夫すると図2のように  
ひと目見ただけで内容が分かるよう  
になり、より伝わりやすい、読み手に優  
しいものになります。  
文字の入力やフォントの大きさにつ  
いての説明はここでは省き、打ち込ま

れた文章のレイアウトをどのように変  
えるかに重点をおいて説明をしていき  
ます。



図3

## 1、縦書きにする

まず横書きの文章を縦書きにし  
ましょう。

「ファイル」メニューの「ページ設定」をクリック  
します。すると図3のようなダイア  
ログが開きますので、上の「文字列と  
行数」タブをクリックします。その中  
の文字方向で「縦書き」を選びます。  
次に「余白」タブをクリックします。  
印刷の向きで「縦」を選びます。最後  
に右下の「OK」ボタンをクリックし

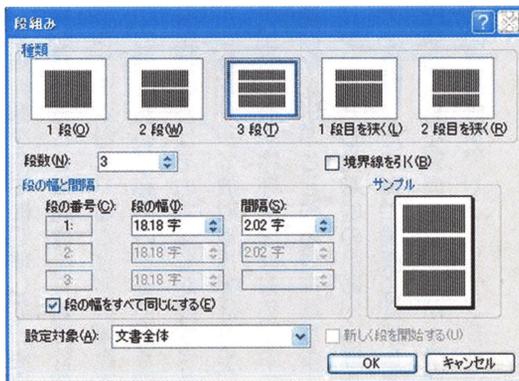


図4

これで横書きの文章が縦書きになり  
ました。(順序を逆にすると、表示が  
異なります。そのときはもう一度始め  
からやり直して下さい)

## 2、三段組みにする

次に三段組みにします。「書式」メ  
ニューの「段落」をクリックします。すると図4  
のようなダイアログが開きますので、  
種類のなかから「3段」を選び、右下の  
「OK」ボタンをクリックします。

これで三段組になり見やすくなりま  
した。(四段以上にした場合は、ダイ  
アログの「段数」の所に必要に応じた  
数字を入れてやるとその段組みにな  
ります)

テキストボックスを利用した表題の  
付け方、図の入れ方、ページ枠の付け  
方は次号以降で紹介の予定です

(記事担当 IT委員 会)

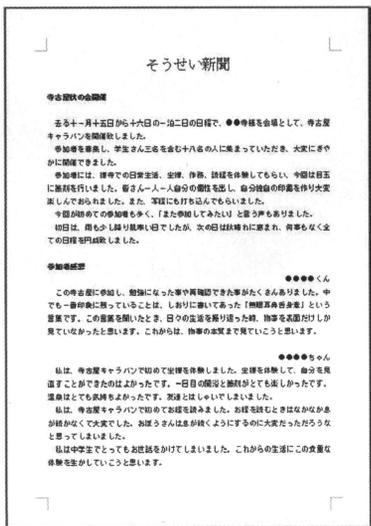


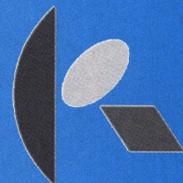
図1



図2

駒

## 駒澤大学・駒澤短期大学の試み



駒澤大学・駒澤短期大学所在地

〒154 - 8525 東京都世田谷区駒沢1丁目23番1号

TEL : 03 - 3418 - 9111 (代表)

ホームページアドレス <http://www.komazawa-u.ac.jp/index.html>

本企画「現代と宗教」では、現代社会と仏教とを結び付ける具体的な視座の提供として、宗教教育の現場の専門家から仏教の教えが如何に現代社会に敷衍されるべきかについてご提言をお寄せいただきました。

その宗教教育の活動紹介の取りまとめとして、今号では駒澤大学・駒澤短期大学学長、同大学仏教学部教授である大谷哲夫先生にインタビュー

を行い、駒澤大学での教育が今後どのように進められるのか、また将来の寺院後継者育成という昔ながらの役割と、一般学生に対する宗教教育のあり方が今後どの様に展開されるべきかについてお聞きいたしました。

並びに、大谷先生が最近上梓された御著書についてもお話を伺っておりますのでご紹介させていただきます。

聞き手…我々宗侶には、駒澤大学のOBも多くありますが、最近駒大ではさまざまな新しい活動をされているように拝察いたします。具体的にはどのような活動をなさっておられるのでしょうか。

大谷先生…そうですね。駒澤大学の淵源は安土桃山時代の文禄元年（一五九二年）、今から四百十三年前にさかのぼることができます。当時はもちろん現代のような大学ではなくて、曹洞宗の禅への参学と漢学の振興を目指して、現在の東京水道橋にあった吉祥寺に創設された学林が本学の歴史の始まりです。その学林が江戸時代に入って「旃檀林」と呼ばれる

ようになりました。旃檀林の「旃檀」は、ことわざにもなっている「旃（＝梅）檀は双葉より芳し」の「旃檀」です。「証道歌」の一節である「旃檀林に雑樹なし、鬱密深沈として獅子のみ住す」から採られました。それで、その学林が現在のようになつたのは、一八八二年（明治十五年）の十月に校名が「曹洞宗大学林専門学本校」と変更されたときになります。そこから数えても百二十二年の伝統のある大学です。

本学では近年、これまで以上に多様化する社会に適応できる人材育成を目指し、新規の学部を創設しております。まず医療健康科学部ですが、これは二〇〇三年に開設したもので、世界的に

見てもこの分野の最先端の教育・研究を行っている学部です。現在の医療現場は、放射線技師のすぐれた力量がなければ立ち行かない状況にあります。放射線の安全性を確保すること、デジタル画像を精細に処理して診療の精度を高めること、画像を有効に管理するシステムをつくること、いずれも医療の場において必須のことであり、放射線技師にはそのすべてが要求されます。したがって放射線技師は医学・電子工学・原子物理学をはじめとする関連諸学を学ぶことが必要になります。しっかりとした基礎の上に、高度な技術を学習した、真に医療に貢献しうる優秀な人材を育成することが本学部設立の目的です。

# 現代と宗教

## 宗教教育における 現代社会へのアプローチ

また、昨年（二〇〇四年）四月には、法曹界に有為の人材を送り出すために法科大学院を立ち上げました。経験豊かで研究にもすぐれた業績をもつ教授陣が、第一東京弁護士会のバックアップのもとで、市民生活に役立つ法曹、企業法務に精通した法曹を目指して水準の高い教育を行っております。

聞き手…そのような中で、我々曹洞宗が担う禅との関わりはどのようなものになっていくのでしょうか？

大谷先生…当然、本学は禅の精神に基づく建学の理念「行学一如」に則った教育を行うことを校是としております。これを現代風に言いかえれば、実践（行）は学問（学）に基づき、学問は実践を前提とするということです。つまりは、学問は社会に還元されなければならぬということです。医療



健康科学部や法科大学院もこうした理念に立脚して開設されたと言って良いでしょう。同じ理念のもとに、二〇〇二年にはコミュニケーション・ケアセンターを設立いたしました。本センターは臨床心理学コース大学院の実習施設であり、これによって同大学院は臨床心理

士資格試験を受けることができる第一種の指定大学院になりました。この施設をもっている大学はあまり多くありません。ここから育った臨床心理士には、社会的なさまざまな場面での活躍が期待されます。今、社会で起こっている事象を見ると、大きな役割を担うことになるでしょう。また、同センターは地域住民の就学相談や心理的な問題の相談に応じており、地域貢献型の開かれた施設ともなっております。

今後、既存の学部においても、現代社会が必要とする研究・教育を実現する方向への改組転換が行われなければならないと考えておりますし、さらにもっとも今日的な課題に迫る新しい学部の創設も計画しております。大学をめぐる環境が激変する中で、さらなる飛躍を遂げるべく、日々活動しております。

聞き手…さらにお聞きしたいのですが、近年では「心の時代」とも言われ、我々の生き方自体が問われる時代になってきていると思われませんが、そうした時代の要請には駒澤大学ではどのように応えていかれるのでしょうか？

大谷先生…二〇世紀がハード（科学）の時代とすれば、二一世紀はソフト（心）の時代と言われております。確

かに、二〇世紀の科学はすぐれた成果をもたらしましたが、ともすればそれを支えるべき人の心のありようがなござりにされてきたのではないのでしょうか。ここには、西洋的価値観が重視されすぎたとも言えましょう。最近亡くなったフランスの哲学者デリダは近代を支配した二元的な西洋的思考を洗いなおそうとしました。本学の建学の理念「行学一如」は「修行」と「悟り」は同時であるという道元禪師の禪の精髓に基づいています。「行」と「学」を「一如」にするということは並大抵のことではなく、人の心のありようを問うことになります。駒澤大学は学びと実践を融合する「心」、西洋的価値観とは一味違った、仏教、特に禅の価値観を基底とする大学です。他を排除することをよしとせず、大きく包み込みながら個々の心のありようを大切に、育む大学でありたいと常に願っております。私は、駒澤大学はこれからの時代にもっともふさわしい理念をもつ大学だという自信をもっています。

そして、社会に貢献する学生、現代に見失われがちな公共概念を提唱し、実践する学生、人の真の幸せへ思いをいたす学生がこの大学から輩出するものと確信しております。

聞き手…話が教育理念のところまで参

りましたので、関連して、大谷先生が最近上梓されました『道元「永平広録・上堂」選』についてお聞きしたいと思えます。今年の二月に講談社学術文庫から道元禪師が行われた「上堂」に関して、その一部を現代語訳し、語義や解説を付しておられます。文章も平易に書かれたとのことですが、我々青年僧が今後どのように祖録などを学んでいけば良いかご教授下さい。

大谷先生…道元禪師は、上堂で「明得・説得・信得・行得」と言われていますが、道元禪師は全てを明らかにして、全てを信じて、全てを行じることが必要だとされています。行じきった上で、それらを発信することも必要で、これがまさに「説得」です。で、不遜な言い方になるかもしれませんが、従来の宗門人の勉強の仕方は、行じるのと一本槍だったと言えましょう。「只管打坐」と言いながらその実態がよく分かっていなかったのではないかと思うのです。「ただ、坐れ坐れ」って、確かに坐った人は分かるかもしれないが、坐らない人はどうなるのか？ そうではなく、言葉として愛語として納得し、納得させなければならぬわけですね。一方で言葉の世界では「八九成道い得たり」というわけですね。ところが実際は「八九成」まで中々言えな

いわけです。しかし、そこまで突き詰めてやって百尺竿頭から一步を踏み出さなければならぬわけです。それには、やはり祖録などを読んでいかなければならないと思うんですね。でも、『永平広録』は漢文ですから、中々安易な気持ちでは読めない書物です。『正法眼蔵』などを読んで参照してみても意味は分からないです。実際に、私も

中々読めてこなかったです。それはただの文章として、または情報としてだけしか入ってこないためであって、信仰心も何もないからです。私の師匠の横井覚道先生は、『正法眼蔵』は読むんじゃない。拝読しなさい。」と、よく言われました。それで、拝読して得たものを『永平広録』の上堂で確認するべきだと思っております。



私がこの本を書いた理由ですが、そもそも道元禪師が悟りというものをも日本に持ってきて、『正法眼蔵』や「上堂」で示衆し、修行僧達に悟りの実態を講義したわけですね。ですので、今回『永平広録』の一部ですが、道元禪師が示された悟りというものを言葉で、それも現代の言葉で表現し伝えようということですね、書いたわけですね。

聞き手…大谷先生から我々青年僧侶へのご意見などあればお伺いしたのですが。

大谷先生…意見という



ほとんどないですが、とにかく仏教の可能性を前向きに考えてほしいということがあります。仏教はいつの時代であっても、その時代に生きる人びとにとつて、極めて重要な「魂のやすらぎ」の場でありました。つまり、我々の祖先は仏教と出会うことによって、自然と共に生きる勇気やあらゆるもの

に対する慈愛の心を獲得したとも言えます。ましよう。「仏教は抹香臭い」などという一方的に言われることで、どうしても我々の信念は揺らいでしまうこともあります。しかし、ただの「癒し」などでは解決できない。「真のやすらぎ」を求める声はますます大きくなっていくように思えます。そこで、これは駒大の学生にも言うて聞かせるのですが、自分で課題を作り、課題を見極め、解決に懸命と立ち向かい、最終的にはその成果を社会に還元できるような、そういった人材になってもらいたいということがあります。「随処作主」の生き方を実践することで、あらゆる環境で生き抜いていくだけの融通無碍なる人材になってもらいたいと願います。

聞き手…大谷先生、お忙しい中ありがとうございます。聞き手・文・写真 広報委員会 秋・菅原

大谷 哲夫 先生 略歴



昭和十四年（一九三九）、東京生まれ。早稲田大学第一文学部を卒業後、同大学院文研（修士課程）を修了されて、永平寺に安居。送行後駒澤大学大学院

文研（博士後期課程）を満期退学。曹洞宗宗学研究所を経て、昭和五十二年（一九七七）に駒澤大学に奉職されました。そして、平成六年（一九九四）から学生部長・教務部長・副学長などを歴任されて、現在、駒澤大学学長。仏教学部教授。主な著作は『訓注 永平広録』（上下2巻・大蔵出版）、『和訳 従容録』（一穂社）、『永平の風』（文芸社）など、論文を多数発表。

読者プレゼント

起つ! 翔ぶ! 飛く!  
駒澤大学  
KOMAZAWA UNIVERSITY  
知的好奇心の高い  
駒澤大学を再発見して

道元 永平広録・上堂 選  
大谷哲夫  
『正法眼蔵』と並ぶ名著  
道元が全生命を賭して  
門下に語った説法集

今回のインタビュの際、大谷先生が監修された『起つ! 翔ぶ! 輝く! 駒澤大学』（文芸社）と執筆された『道元「永平広録・上堂」選』（講談社学術文庫）を、それぞれ三冊ずついただきましたので読者プレゼントトいたします。下記連絡先まで葉書にて「氏名・郵便番号・住所・電話番号・希望する著作」を明記の上、お

申し込み下さい。なお、抽選とさせていただきます。当選のご連絡は発送をもってかえさせていただきます。  
〒三六九・〇三〇一  
埼玉県児玉郡上里町金久保七〇一  
陽雲寺内  
『そうせい』読者プレゼント係  
武田 宛

# 宗派を通じた環境運動

## 曹洞宗「グリーンプラン」のケーススタディ

環境問題への取り組みは、まず産業革命発祥の地であるイギリスから、都市環境対策、公害防止、公衆衛生対策として十九世紀に始まり、やがて欧米諸国にて環境整備、自然保護、国土保全の制度が整備されていきました。

その市民的良識は一九六八年に民間有識者によるローマ・クラブの活動を生み、地球総体の保全の立場から警告を発した『成長の限界』(七二年)が有名です。同じ年にはスウェーデンで国際連合人間環境会議が開催され、環境のあり方についての国際的指針が示されました。

九二年にブラジルで開催された地球サミットでは、環境問題の中でも特に大きな割合を占めるとされる地球温暖化問題を巡って、先進国とその他の国々との利害の対立があらわになると共に、国家の

枠組みを越えた環境NGOのネットワークが活発化してきました。

こうした世界の情勢に沿って日本でも公害対策基本法の制定(六七七年)とその根本的改正(七〇年)、環境庁(現環境省)の発足(七一年)があり、環境基本法の制定(九三年)を経て、気候変動枠組条約第三回締約国会議(九七年)では議長国として京都議定書(二〇〇五年二月発効)の作成に務め、現在に至っています。

そこで今号ではダンカン師より、日本の宗教界の環境問題への逸早い取り組みとして、曹洞宗の事例を御紹介いただきました。なお、グリーンプランに関する曹洞宗の公式見解は、曹洞禅ネット(<http://www.sotozen-net.or.jp/>)にて閲覧できます。

### ◇グリーンプラン

前号でも紹介した様に菅原(曹洞宗龍泉寺住職)が個人的な関心をとおして環境問題に関わる一方で、曹洞宗は一九九五年より宗派をあげて環境保全を促進している。既成仏教教団のなかで、宗派による環境運動

にいち早く取り組んだのは曹洞宗である。曹洞宗の「グリーンプラン」は東京に本部を設置し、全国一万五千ヶ寺の寺院に推奨されている。

「グリーンプラン」は曹洞宗の現代の諸問題に取り組むスローガン、「人権・平和・環境」に立脚する。同宗派

は小冊子や本の出版、シンポジウムの開催などを通じて僧侶・寺院・宗派の諸団体(教区・婦人会・仏教青年会等)に、環境問題に関わることを促している。出版物の多くは、両祖といわれる道元禪師と瑩山禪師の教えを明らかにして、自然界への繊細な感覚を育むと同時に資源節約を説明

する。道元禪師によれば、草木・森林は仏性の顕現であり、僧院生活は水や食物の節制を意味する。

一九九八年に宗務庁より出版された小冊子『グリーンプラン 行動のためのQ&A』では「なぜ仏教教団である曹洞宗が、環境問題に積極的に取り組まなければならないのでしょうか?」という質問があげられている。その応答によると、釈尊・道元禪師・瑩山禪師は自然との共存だけでなく物事を判断する正しい智慧の養成と小欲を説いたのである。例えば、「平常心是道」は次のように説明されている。「平常心とは、ごく自然な、何気ない息づかいの不思議さに気づくことです。天地自然の大道の有り難さに気が付く事です。これを仏道ともいいます」。



## ◇◇個人レベルでの実践

またこのパンフレットでは、伝統的な一般檀信徒への手引書である『修証義』に言及し、禅堂で食前の言葉として使われてきた五観の偈を模倣した「グリーンライフ五訓」を掲載している。

大地のみどりを守りましょう

大地はいのちの故郷です

水はだいに使いまししょう

水はいのちの源泉です

光熱はむだなく用いまししょう

光熱はいのちの活力です

大気はきれいに保ちまししょう

大気はいのちの広場です

自然とともにいきまししょう

自然はほとけの姿形です

この五訓は「グリーンプラン」の骨子を示したものであるが、教学の解釈や環境運動の正当性を主張することを目的としたものではない。むしろ個人と寺院レベルで実践できる一人一人の生活に目を向けている。各檀信徒と寺院に配布されている「グリーンプラン」の小冊子には、具体的な取り組みとして電気製品の省エネ使用方法と、宗派の目標でもある消費エネルギーパーセントの削減を明記している。そして自然にやさしい製品の購入促進、遺伝子組み替え食品への警告、一九九九年のリサイクル法にもとづくゴミ分別を

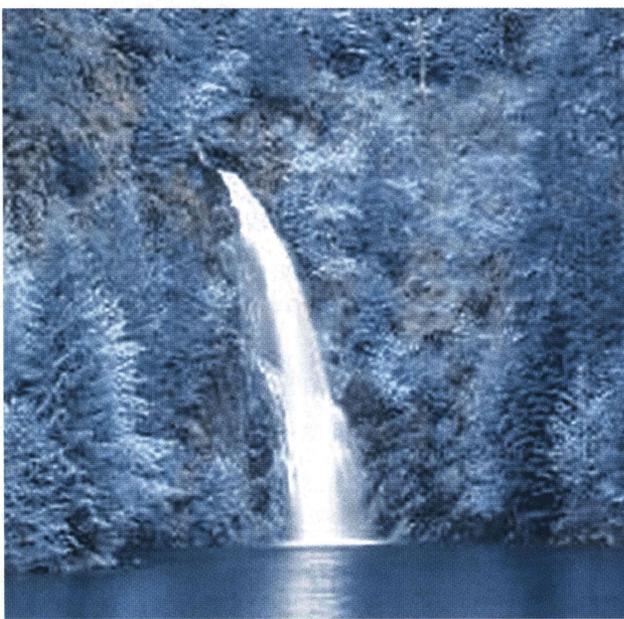
すすめている。

こうした同宗派の環境問題への

取り組みはデータ化され、各檀信徒の家庭にも届けられている。車のアイドリング防止、エアコンや冷蔵庫等の適切な使用方法、浴室の光熱節約によって各家庭から排出される二酸化炭素は年々減少し、その結果各家庭での光熱費の消費も抑制される。そして余った光熱費はセービングされ基金に寄付されるケースもある（例えば、二酸化炭素一〇・二Cキログラムを排出減少することで、二十円の光熱費が貯蓄される）。このようにして仏教が説く「知足」と「布施」は日々実践され、檀信徒の環境保全意識は高まる。

## ◇◇寺院・団体での実践

次に各寺院レベルでの実践活動のみてみよう。埼玉県川口市の興禅院では「緑の回廊」と「小生活圏」がつくられている。横浜市の大本山總持寺では森林生態学者との「千年の森」（再植林）共同プロジェクトが開始されている。また、全国六百五十ヶ寺の曹洞宗寺院が集まって酸性雨のモニター装置の設置が促進されている。こうした寺院単位での環境運動には年々理解が示されるようになった。興禅院住職・早船元峰は、「お寺は人間の聖域にとどまらず、一切衆生の聖域である」と寺院の役割を述べている。一九九七年に埼玉県大宮市



（現・さいたま市）で千六百人を集めて開催されたグリーンプラン・シンポジウムでは、ある参加者から次のような提言がなされた。「お寺は環境問題への駆け込み寺でなければならぬ」。参加者の提言は、仏教寺院が環境破壊危機に瀕する現代人の精神回復の場にならないことを示唆し

たものと思われる。

各檀信徒および一寺院の奉仕活動に加えて、宗派の団体としては地域寺院および百を超える教区で組織される婦人会の活動が活発である。婦人会は「街頭キャンペーン」を実施し、学校の門前、ショッピングモール、川の土手などにおける清掃から家事用品として環境にやさしい製品の販売促進、植林プロジェクト等の広範囲にわたる運動に従事している。

（以下次号、文中敬称略）

文・ダンカン、隆賢・ウイリアムス

一九六九年生まれ。長野県の曹洞宗広沢寺で得度。

ハーバード大学より博士号を取得し、現在、カリフォルニア大学アーバイン校助教。東アジア仏教専攻。

著書：The Other Side of Zen（二〇〇四年ブリンストン大学出版）

編集書：American Buddhism（一九九九年Curzon出版）、Buddhism and Ecology（一九九七年ハーバード大学出版）

**梅花流法具指定販売店**

寺院莊嚴具・京仏壇・京仏具・法衣・袈裟・打敷



株式会社 安 藤

本社（〒605-0081）京都市東山区古門前通花見小路東入ル  
 ☎ 0120-29-8161（法衣部）  
 ☎ 0120-29-8165（仏具部）  
 ☎ 0120-19-8168（贈答品部）

東京店（〒105-0014）東京都港区芝2丁目15番2  
 ☎ 0120-3232-09

福岡店（〒812-0036）福岡市博多区上呉服町12-7  
 ☎ 0120-2143-22





# 美 健 食 菜

— 青年僧による精進料理紹介 —

## 野菜の皮まで食べて、トコトン使いきる料理

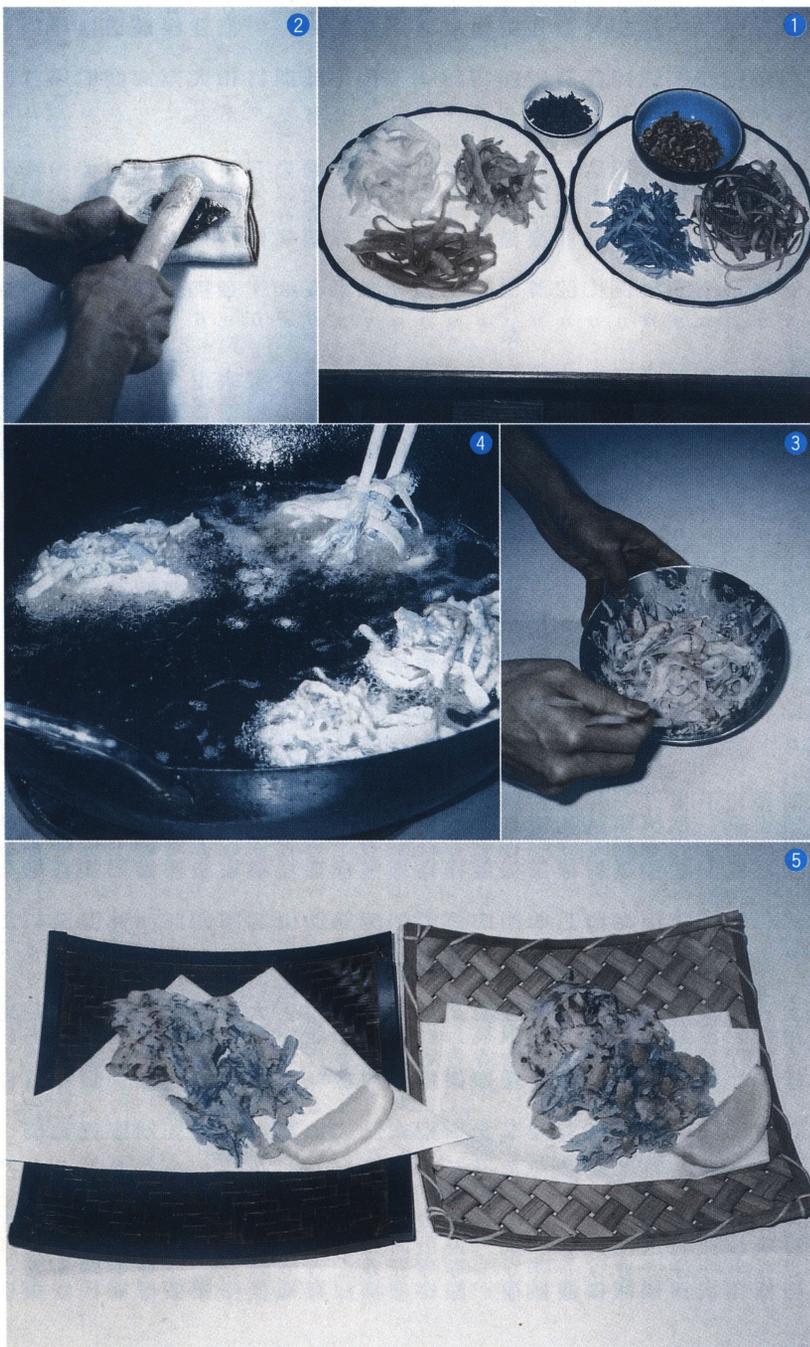
昨今、「リサイクル料理」として尚も地球にやさしいエコクッキングなどという言葉をよく耳にしますね。

そこで今回は、つい捨ててしまいがちな野菜の皮、出がらしの緑茶葉などを天麩羅にしてトコトン使い切りたいと思います。

きれいなところを使つて料理をすることも大事ですが、その余った材料を

使いきるところに親切心が生まれ、最終的には自分のアイディアひとつで美学に変わってくると私は思います。

「何もそこまで使わなくても…」と思わずに、皆さんも小さなことから取り組んでみましょう。やがて地球環境を助ける一人になつていくことに気がくでしょう。



天麩羅その① (写真①左)  
材料

大根、人参、じゃがいも、それぞれの皮、出がらし緑茶葉、すだち(レモンでも可)、小麦粉、片栗粉、サラダ油、水

天麩羅その② (写真①右)  
材料

春菊、ごぼうの皮、柿の種(おつまみのスナック類)、小麦粉、片栗粉、サラダ油、水

作り方  
①下ごしらえとして、出がらしの緑茶

葉をクッキングペーパーに広げ乾燥させておく。

②春菊以外の野菜をすべて皮むきして、長めにそろえる。

③柿の種はビニール袋に入れて、棒で荒めにくだく。(写真②)

④春菊の硬い茎は縦に切つてから斜めに切りすべて使う。

⑤小麦粉と片栗粉をそれぞれ50g、水50ccをボールに入れて、天麩羅その①の材料を混ぜてかき揚げにする。

(写真③)④、天麩羅その②も同様で材料が長いので、大きすぎないように少なめに入れる。

⑥材料が長いので、大きすぎないように少なめに入れる。

⑦レモン、塩、お好みの天つゆを用意し出来上がり。(写真⑤)

今回は天麩羅にしましたが、きんぴら炒めにしてもいいですし、皮引きの野菜は鍋物にもすぐ煮えて便利です。残菜をなるべく出さない料理法で皆さまも日々精進して下さい。「捨てればゴミ、活かせば薬膳」の精神を心掛けていきましよう。

文・白澤 雪俊(しらさわ せつしゅん)

昭和四十五年、青森県弘前市生まれ。十八歳で永平寺別院に安居修行しながら、駒澤短期大学(仏教科)に学ぶ。

卒業後一年間東京都港区の青松寺に随身(住職にお仕えし学ぶ修行僧)として過ごし、福井県曹洞宗大本山永平寺にて、七年間安居修行をする。この七年間の中、約三年間を典座寮に配役される。

永平寺送行後、大本山永平寺東京別院長谷寺副典として再安居。

現在、青森県弘前市普門院副住職として師匠を補佐する傍ら、青森県弘前曹青会長も務める。

著書『身体にやさしい料理をつくる』(二冊)トンプレス

碧 層 々

最近、さまざまな報道で地震災害に関するものが見受けられます。それは、特別番組やドラマ、テレビ・ラジオのコーナー、新聞や雑誌まで含めるとおびただしい数になります。

ここ数年各地に於いて発生した地震災害により、身近に地震災害があることを感じ、更には地震予知連絡会の予知情報もこのような報道を増やし、私たちに問題意識の宣揚を促そうとしているのでしよう。

私事ですが、ある法事のお齋の席で消防官の方とお話をする機会がありました。その方は消防学校で教官を務められ、この四月からは再び消防署の勤務に戻られるとのことでした。

その中には、最近頻発する災害に関するお話も出てきました。消防庁及び消防署としての救援活動については、優秀な消防官を養成しその力を発揮する準備が整えられているそうです。

その訓練の中には、災害時に有効な食料となるといわれる「アルファ1米」を活用しているとお話を伺いました。頻繁に起こる災害の発生に、多くの消防官の方が思いを巡らされているようで、ある消防署長の方は、被災時には各寺院住職とその寺の檀信徒が持つ情報ネットワークが非常に有効である事をお話されたそうです。

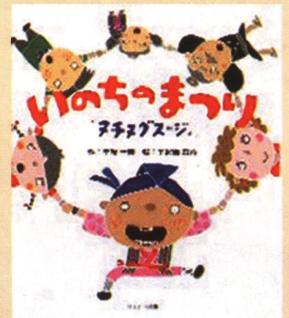
第十五期全国曹洞宗青年会は、今回の災害発生に際して各曹洞宗青年会に被災地救援活動をお願いをして参りました。今後はこの度の経験を生かして、宗務庁やその他の団体との連携を更に深めながら、緊急時のみならず平時の事も視野に入れた活動を考えていた

きたいと考えております。

二年間にわたりおつきあい頂いた私のコラムは今回で最終回となります。拙い文章を御覧頂き誠に有り難うございました。

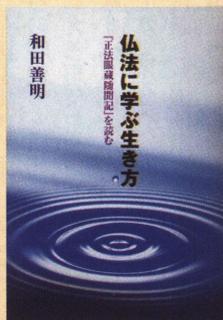
全国曹洞宗青年会 会長 山口英寿

そうせい図書館



この度、念願の絵本『ヌチヌグスージ』を出版する運びとなりました。

『ヌチヌグスージ』とは沖縄の方言で、「いのちのお祝い・いのちのお祭り」という意味で



この書籍は、著者が住職とされて以来十四年にわたって毎月一回続けられてきた托鉢の際に、法修行として檀信徒・地域の方がたに配られた法話をまとめられたものです。「現代は、欲望が満たされることが幸せだと考えられ、欲望が解放された時代です。…中略…」

ういう欲望とどのようにつきあっているのかというのが「宗教の役割です」という問題意識の下に、懐妊禪師が道元禪師の説示を筆録された『正法眼蔵随聞記』を題材にして、

す。始めなく終わらなき悠久の時の流れの中、廣大無辺の生命の繋がりが今ここにあり、奇跡の存在が自分自身であることを自覚することが、いのちのお祝いであり、与えられた生命を光り輝きながら共に生きぬくことが、いのちのお祭りであるという想いをこの絵本に込めました。

ご覧になった皆様は元氣と安らぎ、歓喜と調和に満ちあふれますように。

(作者・草場一壽氏の「絵本版にあたり」から引用いたしました)

宗教心を失った「物の時代」に生きる我々に人生観・宗教観・教育観を訴えられています。

●只稀有の道心者、道者の由を人に知られんと思ひ、身にある失を人に知られじと思へども、諸天善神及び三宝の冥に見ゆる処なり。

(宗教に無縁な者は、人の目はおそれても、仏さまの目はおそれません。しかし、おそれなければならぬのは仏さまの目です。たとえ人は見ていなくても、仏さまはちゃんと見ておられます) ●作すことの難きにはあらず、能くすることの難きなり。

(姿や形を調えることは大切ですが、しかし、形式をまねずればよいというわけではありません) ●細に分別して真実の善を見て行じ、真実の悪を見てすつべきなり。

初學者への丁寧なお示しに、現代にも通ずる確かな警句を讀み取ることができるとは嬉しいでしょう。

〔本の紹介〕  
 『ヌチヌグスージ』  
 作 草場 一壽  
 絵 平安座 資 尚  
 出版社 サンマーク出版  
 価格 一、五七五円(税込)  
 なお、購入は全国の書店店頭か、左記に御注文をお願いいたします。

特定非営利法人 地球市民の会  
 〒八四〇・〇八二二  
 佐賀県佐賀市高木町三・一〇  
 TEL 〇九五二・二四・三三三四  
 FAX 〇九五二・二四・七三二一  
 URL <http://tpank-net>

(いろいろな角度から長い目で見、一時的な快楽に惑わされず、善悪を判断し行動する必要があります) ●未だ得ずんば見るべし、未だ見ずんば聞べしとなり。

(仏法の話を書くことから始めてみませんか) ●道は無窮なり。悟りても猶行道すべし。

(私たちの人格修行には終点はありません。…中略…あの世に変わっても、生まれ変わり死に変わって、永遠に道は続いていくのです)

初學者への丁寧なお示しに、現代にも通ずる確かな警句を讀み取ることができるとは嬉しいでしょう。

〔本の紹介〕  
 『仏法に学ぶ生き方』  
 「正法眼蔵随聞記」を讀む」  
 著者 和田善明  
 出版社 すずき出版  
 価格 一、五〇〇円+税

「そうせい」に対するご意見・ご感想をお寄せ下さい。

あて先  
 〒369-0301  
 埼玉県児玉郡上里町金久保701  
 陽雲寺内 そうせいサロン係  
 電話 0495-33-8255 武田まで

編集室敬白

第十五期広報委員会の二年間に渡る広報活動は本号をもって終了となります。読者皆さまには「そうせい」へのご理解とご支援を賜り誠にありがとうございました。

ふり返って見れば、この二年間にはさまざまなことがございました。特に世界各地では自然災害が多数発生し、被災された方がたの状況を察するに、痛恨にたえないものがございました。

全曹青では、ボランティア委員会の活動や、ボランティア基金を通じて、被災者への支援活動を行なってまいりました。しかし、筆者個人といった何ができたかを考えてみますと、結局何もできていない現実には自問する毎日です。

「同事」とは、他人の痛みを自分の痛みとして共有することではないだろうか、自分はその痛みを本当に感じることでできたのか、またその痛みを感じようと努力したのであるだろうか。何かを問われている二年間でもありました。

さて、新たに組織される十六期広報委員会も、青年僧侶の視点という切り口で「そうせい」誌面ににぎやかに飾っていただけることでしょうか。これからも「そうせい」をよろしくお願ひ申し上げます。

# 京都曹洞宗青年会

CLUB REPORT  
青年会モザイク

発足	昭和38年	会長	柳田 彰宣	副会長	大倉 由照・梅原 敬太
事務局長	井笹 孝昭	会計	大山 義道	会員数	48名



▲秋冷禅の集い

**京** 都曹洞宗青年会は、昭和三十八年という全国でも早い時期に発足いたしました。当時の結成趣意書には「組織的、且つ教化的な行動を通して、自らの研修を深めていくこと」を課題とし、「一般の若い人びとの中に入って、同世代人とし全ての連帯感の上に、私達宗侶との交流をはかる一方法を計画することがうたわれています。これに則り実行されたのが、道元禅師初開の道場である興聖寺専門僧堂にて始められた「緑蔭禅の集い」です。後年、会場

を智源寺専門僧堂に移し、興聖寺での催しは「秋冷禅の集い」と名を変えましたが、現在も年二度の坐禅会は京都曹青の根幹をなす行事となっておりま

**平** 成十四年には創立四〇周年記念事業として、興聖寺にて法脈会と坐禅会をミックスさせた「法脈禅の集い」を開催し、百十名を超える方に

参加をいただきました。そして、日を改めて京都市内のホテルにて記念式典を行っております。その折には、記念品をお持ち帰りいただく代わりに、ラオスの子どもたちに絵本の箱を贈るとい

う企画を実行しました。これは、「この時代」という言葉すら色あせて聞こえる現代日本において、私たちが今なすべきことをこの勝縁に託したものです。ラオスへの想いはさらに高まり、寄贈した現地小学校への訪問を経て、

継続事業として托鉢を毎年行っていくことに至っております。

**さ** らに近畿曹洞宗青年会連絡協議会の一員として、ソフト

ボール大会や禅文化学林、昨秋東大寺にて開かれた全曹青創立三〇周年事業などにも参加し、

交流を深めています。

**ま** た、京都府下の青年団体が構成される「京都青少年ゆめ

ネットワーク（ゆめつと京都）や「ユース21京都」にも団体加盟

し、役員を派遣して各種事業にも参画しています。こ

れらはいわゆるボランティアの活動なのですが、イベントや災害時派遣などを通じて、社会に開かれた目を育てる意識を持つて



智源寺緑蔭禅の集い



▲京都市内での托鉢



▲さあ、行くぞ！  
全国車いす駅伝競走

やっています。とくに大きな行事は「全国車いす駅伝競走大会」への参加です。ここには、仏教者として避けては通れない「人権」や「社会福祉」へ関わっていく足がかりとしての位置づけも含まれています。昨年度には台風二三号水害での活動もありました。まず被災のひどかった管内寺院に入り、続いて一般家屋での支援にも加わって、災害への認識を高める貴重な体験をいたしました。

**以** 上のように、京都曹青は夏秋の坐禅会を柱とし、冬の車いす駅伝やさまざまな研修、托鉢や萬燈供養などの継続により、会員相互の親睦と向上を目指しています。これからも仏教徒としての課題を模索しながら、先輩方が築いてこられたものに恥じないよう少しずつ歩んでいきたいと思っております。今後のさらなるご指導やご鞭撻を



# ち え ぶくろ ほとけさまの知恵袋

頒布  
ご案内

全国曹洞宗青年会では、「ほとけさまの知恵袋」を制作いたしました。

青少年が混迷している今、青年宗侶が青少年の目線に立ち、何かを一緒に取り組む活動が求められており、実際に活動されている最たる行事として、「子ども緑蔭禅」「子ども日曜学校」などがあげられ、それら青少年教化活動の一助となればと願い「ほとけさまの知恵袋」を企画いたしました。

「ほとけさまの知恵袋」は、お釈迦さまを胸に抱き、より良い自分になるための心の拠り所となるものです。オプションとして、「子ども用腕輪念珠」は仏さまの行事、お参りの時に手におはめ下さい。「名札付きお経カード」は「ほとけさまの知恵袋」に入るサイズで、ネームプレートとして、また般若心経の経本カードとしてお使い下さい。「参加バッジ」は行事などの参加の記念として「ほとけさまの知恵袋」の竿などにお付け下さい。

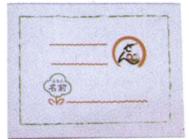
また、幼稚園行事など違った視点からも様々な使い方ができるよう青少年教化アイテムとして仕上げました。各現場において幅広い用途で「ほとけさまの知恵袋」を生かしていただければ、嬉しく思います。



【子ども用腕輪念珠】



表



裏



【参加バッジ】直径2cm



中面

【名札付きお経カード】



## 価格

1本800円にて実費頒布。送料は別途申し受けます。

(子ども用腕輪念珠・名札付きお経カード・参加バッジが付きます。)



## 注文方法

下記の注文書に必要事項をご記入の上、郵送またはFAXにてお申し込み下さい。



## 申し込み締切り

1,000本限定にて制作販売いたします。お早めにお申し込み下さい。

発送は平成17年7月中旬より申込み順となります。



## 代金支払い方法

製品に同梱されている振込用紙にて、到着後14日以内にお振込ください。



## 申し込み先

〒959-1837 新潟県五泉市寺沢2-1-10 電話0250-41-1234 (有)アスリート ほとけさまの知恵袋 係

FAX 0250-41-1235



## 問い合わせ先

全国曹洞宗青年会総務委員会

委員長 中村嘉秀 電話090-5036-4978

E-mail kashu72@syd.odn.ne.jp

切り取り

## 「ほとけさまの知恵袋」注文書

寺籍番号

注文本数

本

ご寺院名

希望納期日

月

日

ご氏名

通信欄

ご住所 〒

電話番号

# 心の扉を 開こう。



## ち え ぶくろ ほとけさまの知恵袋

### 使い方いろいろ

- 子ども緑蔭禅、日曜学校、子ども参禅会などの活動の折に
- 子ども授戒会の血脈袋として（儀式中に掛け血脈を懐に抱く）
- 経本・つどいのしおり入れとして ● お守り（写経・写仏入れ）として ● お寺の法事など諸行事に（本堂備えつけ） ● 子弟との勤行に ● 首かけ名札プレートとして ● 幼稚園園児に（諸行事・卒園記念・ごほうびに「仏さまからの金メダル」として）…etc



◎危険防止用取りはずしマジックテープ付き

お申し込みに関する詳細については、  
裏面（27頁）をご覧ください。

